

触媒懇談会ニュース

触媒学会シニア懇談会

神楽坂問題集

(株) 新エネルギー研究所
取締役 齊藤 泰和

東京理科大学神楽坂キャンパスに15年勤務した。その間2年ほど付設の資料館(一般に言う博物館)の官庁の任につき、街のひと(入場無料)、初々しい新人生らのお相手をした。説明役としての責任感から出来上がったのがこの問題集である。

その第1問は「誰が神楽坂を拓いたか?」

そもそもいまの東京は、16世紀戦国時代末期は丘陵と湿地からなる寒村で一部に太田道灌由来のパイロット江戸城、北条氏ゆかりの武士小集団が点在するいわば未開拓地であった。秀吉に移封を命じられた家康がまずとりかかった作業は丘を削り、土を移し堀割を作る埋め立て土木工事で船運バックの町人居住地帯と移転武士大集団からなる消費地帯を拡げていった。秀忠はその路線を継承した。

家光の時代に入って徳川政権は安定し一国一城や参勤交代にみるような幕藩体制が整備され土木工事も転機を迎えた。新体制の中心にいたのが松平伊豆の守信綱である。彼は天下普請と称して戦乱に明け暮れた西国大名にいまや不要となった城石材料・土木技術者・人夫の受け皿として「見付」工事を請け負わせた。牛込見付、四ッ谷見付、赤坂見付等々、外濠を渡る通

路の「見付」である。廃棄する支城の少ない東国大名には掘割工事を担いさせられた。石高の大きさに応じ掘り下げ面積を割り当てられ難工事担当者は人夫代がかさみ経済負担が大きかった。しかしそれこそが幕府の狙いで失業武士対策でもあった。由井正雪への対応は浪人の不穏なエネルギーを天下普請のなかで解消しようとする知恵伊豆守信綱政治の要であった。

徳川三代が気にせざるを得なかったのは仙台伊達藩である。東北地方のどこから秘かに金を掘り出し、かかえ込んでいると幕閣当局は疑っていた。実際、御茶ノ水台地を掘り切って神田川を日本橋でなく両国で隅田川に通じるようにするとか巨大な石壁を含む江戸城大手門の偉容とか、伊達政宗が幕命に応えつつ付け入らせぬよう苦心したお金づかいの遺跡がある。

外濠工事での伊達藩担当は四ッ谷濠であった。四ッ谷の地名は川筋4つの起点だからと説かれている。市ヶ谷・神田川、清水谷・赤坂・溜池・日比谷、千駄ヶ谷・渋谷川の3つに加え、いまの東郷神社、大妻女子大学へ流れ落ちて内濠の牛ヶ淵に至るもう一つの川筋があった。靖国通りと新宿通りの間である。四ッ谷は中仙道、甲府を経て京に通じる軍事拠点で、ここは広く深く掘り下げ江戸城安全保障に供する

必要があった。その土は千代田区番町一帯を武家住宅地にするために使われた。

伊達藩の財政負担は重く四ッ谷工事で遂に音を上げた。正宗死去もあって、さらにいろいろあって、遂に伊達騒動、仙台藩は普通の外様大名に転落した。老中としての信綱は振袖火事のあとの江戸街区復興計画を策定した。天守閣再建は中止、御三家はじめ近所に住んでいた大名は城外に疎開、内堀と外堀を回らし神田川の川筋を変えた。神田川の一部を埋め立てた結果、江戸住民への物質補給ルートとしては日本橋から鎌倉河岸と両国から神楽河岸への2つが整備された。米、味噌、その他食料品、あるいは火事の度に需要の増える材木等々である。

外濠の水面は高さが異なる。最も水面の高い四ッ谷濠は上智大学のグラウンドになっているが、時計回りに四ッ谷見付、市谷見付、牛込見付で次々と水面を仕切られ市ヶ谷濠と飯田濠間の落差は、いまも牛込橋(飯田橋駅西口)から覗き込むとよくわかる。

ところで本稿の首題である神楽坂は牛込見付が起点である。牛込濠に接するその優美な積み石は、阿波徳島藩築城技術者による1636年の所産で、いざとなれば切って落とす牛込橋の横幅はアプローチを支える積み石が当時のままと考証されたので神楽坂に至る道路の幅は当時も今も同じということになる。もとより牛込橋自体は改修を重ねた土台石が濠の底から引き上げられ、見付跡の交番脇に置かれているので通りがかったらご覧になると良いが、その石にはくっきりと「阿波守」の字が見える。西国諸藩がつくらされた見付橋の大きな土台石は西伊豆松崎の所産、数多く切り出す際に間違えぬよう注文主の名を刻んだということである。市ヶ谷見付は森長純(森蘭丸の甥)、四ッ谷見付は毛利、

赤坂見付は〇〇の担当であった。

見付の位置は信綱のプランに沿って定められ御三家の屋敷は尾張藩が市谷見付、紀州藩が喰い違い見付、水戸藩は小石川門の先に置かれたのであるが、牛込見付の設置は経緯を異にする。実は三代将軍家光は祖父を尊敬する余り趣味も一致し鷹狩りが大好きであった。近郊に狩場を求めた信綱は、その候補地戸塚村と江戸城田安門を結ぶ線上に橋を渡すことにし、牛込見付を設けたのである。その道路が今の早稲田通りで神楽坂は牛込橋を渡ったあと坂を登り切るまでを言う。

ところで舟が江戸湾から神田川をさかのぼると飯田濠までが同じ水位、牛込見付で行き止まりとなる。その場所は生活物資の大事な集積地で神楽河岸と呼ばれ人夫が荷揚げした揚場町、軽子坂も現存する。軽子とは人夫の使う背負い籠のことで軽子坂は神楽坂に平行し、すぐのお隣にある。

神楽坂をはさみ神田・上野の商人町とは反対側の大地は家康以来、牛込方とよばれ下級旗本武士団の居住宅であった。牛込北町・中町・南町にみる知册形に区切られた地割は彼らの長屋跡をそのまま引継いでいる。現在は高級住宅地である。

消費する一方の武士が大勢長屋に住むと生活物資の消費速度は高まる。千代田区側に多かった高級武士屋敷からも買物客は牛込橋を渡ってやって来る。武家と町人の居住境界線にあたる神楽坂の江戸時代からの繁盛は、このためである。神楽坂下から坂上までお店が軒を連ねたわが国の夜店は坂の中程にある毘沙門天善国寺前が第1号だそうである。

さて、巻き狩りや鷹狩りはもともと権力者が軍事的優位を示すためのものであった。家康・秀忠時代を経て三代目家康の時代に入ると、その位置付けは将軍のリクリエーションに替わった。狩り場には武士の

集合場所が必要で、そこは馬場と呼ばれた。田安門を出て内濠を渡ってすぐの馬場スペースは、のちに招魂社(靖国神社)に供せられた。江戸城周辺のあちこちに馬場は設けられている。家康の鷹狩りリクリエーションに当てられたのがいまの高田馬場で、当時は戸塚村の米作スペースであった。

家光は秋になったら鷹狩りと思っている。「総務部長」は戸塚村民に刈り入れの早稲種を植え(早稲田)、つぐみを飼うよう命じた。つぐみは鷹の獲物、将軍が鷹を放って収穫なしでは一大事なのでタイミングを見定め部下に知らせ、その合図であちこちに潜む侍や百姓がつぐみを追い立てたということである。

家光が帰路に立ち寄り、和尚から世間話情報を得つつ茶を喫した禅寺が早稲田通りと外苑東通りの交点に現存する。高い塀に囲まれた大きな寺で玄関脇には三代将軍家光公創建の看板が立つ。この寺は春日局大奥後任の女性が国元で死去した夫の菩提を弔うためと願い出、許され勧請したもので敷地ははじめ広大であったが、由井正雪居住の一角を事件後召し上げられ寺とは別の場所という感じで数百米離れた地点に由井神社が建ち今に残っている。

堀部安兵衛の活躍以来、高田馬場は著名である。われわれはこの地を「たかたのばば」と呼ぶけれど、JR も地下鉄も駅名平仮名表示は「たかだのばば」となっている。濁る方が正しい。家光鷹狩りのための武士集合スペースに早稲田の地を提供したのがはじまりである。「高田」は当て字、本来は「鷹田」なのである。

鷹狩りの度に将軍御成り道となる神楽坂は賑やかな商いの道でもある。その繁栄は江戸時代に始まり、明治・大正・昭和・平成へと引き継がれる。その間、関東大震災の打撃が小さかったこと、田中角栄氏の別宅があったことの二つは大きい。

「誰が神楽坂を拓いたか?」には「徳川家光」と答えるべきであろう。優れた補佐役の信綱を得て、又時代の助けもあって、家光は徳川家と幕府に安泰をもたらすことができた。

神楽坂はその成果の一つであった。